

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K03186

研究課題名（和文）漁場図・地誌書等に見る地域の海洋資源利用の過去と現在

研究課題名（英文）The historical changes of marine resource use in fishing ground maps and topography

研究代表者

橋村 修（HASHIMURA, Osamu）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：00414037

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近世期、近代期の各地に残る漁場図・地誌書等を用いて、地域の海洋資源利用の歴史的な変化について解明することにある。国内外における近世近代の漁場図と地誌書等を集積するための調査を進め、図に描かれた漁場の景観や空間利用形態や地誌書に記された魚利用、習俗について抽出した。それを踏まえ、現地調査を実施した。

期間中の成果としては、近世期の都市と村落における地魚利用、薩摩藩領の定置網漁場利用の変化と史料翻刻紹介、近世期の海辺利用の多様性（生業、レジャー）、シイラ魚名分布の歴史的な変化、九州西岸地域における近世後期漁村の疫病対応、刺身と塩干物の歴史などの研究を発表、公表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、これまでの研究で等閑視されてきた非経済的な海洋資源利用の歴史研究（近世の名所図会や地誌書にみられる遊漁、釣り文化、潮干狩り、浜での遊び、釣り見学、海の景色眺望）に道筋をつけたこと、薩摩藩領の近世漁業史料の紹介と研究、魚名研究で見過ごされてきた名前の分布の歴史研究を進めたことなどがあげられる。

社会的意義としては持続可能な海洋資源利用のあり方を歴史の視点から提言したこと、漁業行為の中にある信仰（エビスカツギ）の要素が資源の乱獲を防ぐ意識につながることを解明したこと、現代のコロナ禍において九州西岸部の近世末期の疾病対策の方法を示したことなどがあげられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to elucidate historical changes in the use of marine resources, with the help of historical materials, such as fishing grounds maps and topography in Japan and foreign countries. To accumulate historical materials, we conducted a survey of the landscape of marine and fishing grounds as well as fish use and customs. Based on this, we conducted a field survey.

As achievements during the period, we were able to present and publish research on the use of local fish in cities and villages in Tokugawa period, changes in the use of set net fishing grounds in Satsuma Domain territory and introduction of historical material transcription, diversity of seaside use(livelihood, leisure), historical changes in the distribution of dolphin fish names, response to epidemics in fishing villages in the late modern period in the west coast of Kyushu, and the history of sashimi and salted dried fish.

研究分野：歴史民俗学

キーワード：海洋資源 地誌書 漁場図 歴史地理学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)研究開始当初は、国内外における近世近代の漁場図などが研究の分析対象として認知され始めたところであった。そのため、図に描かれた漁場の景観や空間利用形態を解明するための手法を見出す必要があった。そこで、本研究は歴史地理学的手法を用いて地誌書などの文字史料と漁場図を組み合わせながら検討を進めた。

(2)海と人との関わりの歴史については、経済性の高い漁業が研究対象になり、遊漁やレクリエーションの視点が等閑視されていた。そこで歴史民俗学的手法を用いて、各地(国内外)の日常の海辺利用、魚利用の歴史、漁場の古習俗の歴史を解明することが求められていた。

2. 研究の目的

研究の目的は、2つに大きく区分できる。

(1)歴史地理学的手法による漁場図研究として、国内外における近世近代の漁場図と地誌書を分析対象とし、図に描かれた漁場の景観や空間利用形態についての解明を進めることがあげられる。具体的には漁業や漁場記した地誌に関する調査、各地の漁場図(特に本研究では江戸時代末期の「旧薩摩藩沿海漁場図」)の分析である。

(2)歴史民俗学的手法による研究として、漁場における習俗の歴史展開(旧薩摩藩沿海漁場図に描かれた内之浦郷、加世田郷などにおける定置網漁場でおこなわれてきたエビスカツギ習俗、カンダラ行為など)、全国的な視点からの近世の海辺における遊漁、レジャー、観光、地魚雑魚利用の歴史民俗の解明があげられる。

3. 研究の方法

(1)歴史地理学的手法による研究方法を報告する。漁場図について形態的な視点、機能的な視点からの分類案の提示と、便宜的に近世の図は一部測量図を含むが鳥瞰図的な非測量図を主体としているので「漁場絵図」とし、測量図を多く含む明治以降の図は「漁場図」と区分する視点の提示をおこなった。江戸末期に原本が作成された「旧薩摩藩沿海漁場図」の記載内容について研究を進めた。地形図や海図データと対比させながら、その歪みや正確性について検討した。さらに、漁法と漁場を各郷単位で抽出し、他の文字史料にみられる漁法との比較、漁場の位置を現代の海図データに比定する作業を進めた。比較海洋文化史、比較地図史的な視点から、海外におけるマレーシア(コタキナバル)、フィジー、南インドの漁業関係の地誌書と漁場図についての調査を実施した。

(2)歴史民俗学的手法による研究方法を報告する。各地の漁場や漁村の習俗の歴史について聞き取り調査と近世近代の古文書分析を組み合わせる手法を用いた。魚盗みのカンダラ、ドーシンボウ習俗、エビス拾い習俗、シイラやブダイなどの地魚利用に注目した。具体的には鹿児島県各地の定置網漁業とエビスかつぎ行事について、鹿児島県薩摩川内市上甕町平良と鹿島町蘭牟田において聞き取りと文献調査をおこなった。平良の江戸時代の史料については、奄美市立博物館の童虎山房文庫においても写本史料を撮影調査した。長崎県五島市岐宿町と三井楽町の漁場図については、近世期から昭和期の定置網漁業者である西村氏の歴史について現地での地形観察と古老への聞き取り調査を進めた。海辺や河川を描いた近世後期の名所図会の調査研究も開始した。漁業者ではない一般の人々が海辺の風景をどのように認識していたのか、「遊び」の視点も導入し、遊漁、レクリエーション、潮干狩り、漁業見物を取り上げ、エンターテインメントとしての「漁業」の存在を浮かび上がらせる手法で研究を進めた。地魚利用(各地のシイラ、和歌山のイガミ(ブダイ)、奈良のエソ、エイほか)に関する史料研究、現地調査も進めた。その他のフィールドワークとしては、広島県福山市鞆の浦における伝統的な鯛縛り網漁、京都府伊根町の舟屋集落、熊本県天草市の近世から昭和期までのマンビキ(シイラ)漁とカンダラ慣習、長崎県野母崎地区と五島列島の漁場図(野母崎歴史民俗資料館、長崎歴史博物館所蔵資料)、宮城県気仙沼市のカツオとシイラ、マンボウの漁の歴史と現状、乾季のラオスの漁撈習俗について実施した。

4. 研究成果

(1)歴史地理学的手法による研究成果を報告する。「旧薩摩藩沿海漁場図」の漁法の記載には郷ごとにバラツキがみられ、文字史料との整合性が必ずしもみられない箇所も多くみられた。この研究成果については『歴史と民俗』誌に論文発表した。漁場図については、「旧薩摩藩沿海漁場図」に描かれた鹿児島県内之浦の漁場利用について、現地において定置網漁業とそれに関わるエビスかつぎ祭りの調査、内之浦の網元である久木元家文書(『鹿児島県定置網漁業誌』所収(昭和8年))の分析をおこない、その成果を『東京学芸大学紀要』に論文としてまとめた。

(2)歴史民俗学的手法による研究成果を報告する。近世期における漁場図と名所図会・地誌書に描かれた海洋資源利用、遊漁、レジャーについては、18~19世紀中葉までの『江戸名所図会』『尾張名所図会』『摂津名所図会』『紀伊名所図会』などに描かれた海辺の風景の分析をおこない、歴史地理

学会で報告し、学会誌の『歴史地理学』に論文を執筆した。漁業や社会経済性とは異なる視点からの海辺の多様な利用（遊漁、レクリエーションなど）について言及した。各地の名所図会に描かれた漁業や魚食文化について、地誌書の記載と対応させて分析を進め研究を発表した。海辺と内水面との間に位置する汽水域、干潟の資源利用の歴史的展開についても研究を進めた。この問題に関連してラオスとタイのメコン川流域の乾季の漁撈について現地調査を進めた。地誌書に記された魚食文化についても近畿地方の山間部における海の魚のハレの利用について分析をおこない、論文を執筆した。

研究の終盤においては、これまでの調査で撮影した漁業関係古文書の解読と紹介、研究成果の国際シンポジウム（韓国ソウル）や国内学会での報告と論文執筆を進めた。古文書の解読は、童虎山房文庫（奄美市立博物館）に入る薩摩藩関係の近世漁業史料を対象にし、研究の空白地帯であった鹿児島県大隅地方の漁業史について高山郷の漁場相論史料と漁業状況史料を、薩摩半島南部については南さつま市久志地区の近世末期マグロ網漁業史料を解読し、高山郷史料は「薩摩藩領大隅・高山郷の近世末期漁業関係史料」として『東京学芸大学紀要』にて報告した。東北地方の三陸海岸の回遊魚シイラやカジキ、サメを中心とした漁業文化を西日本と比較する視点で論じた論文を発表した。東北で獲れたシイラやサメが他地域にどのように流通しているのか、栃木県を中心に検討し、またシイラの地方名について渋沢敬三『日本魚名集覧』が典拠とした文献を点検し、江戸時代から現代にいたるまでの魚名地域分布表を作成した。その内容は生き物文化誌学会学術誌（「三陸と日本各地をつなぐ魚の利用 - シイラを中心に」、『ピオストーリー』35）に発表した。また日本民俗学会年会シンポジウム「食と環境 魚食文化による里海の保全と実践活動」において各地の地魚の持続的な利用や地先漁場の入会利用についてコメント発表をおこなった。江戸期の地誌書や紀行文にみられる日本海の越後（柏崎陣屋武士）や佐渡、関東周辺（佐倉藩城下町と九十九里浜、三川（さんが）や鎌倉、江戸との魚利用をめぐる関係。江戸と江の島のカツオ認識の違い）、大阪から京都を経て近江・伊賀を経て伊勢まで（紀行文）、山城淀（淡水魚と海水魚流通、祭事のシイラ利用）、瀬戸内の福山、日向延岡、奄美等における地魚利用記事をまとめた論文を発表した。本研究の調査地である九州西岸地域（五島列島、天草諸島、薩摩藩領）における江戸時代の疫病の水際対策に関する論文を執筆し、疫病の水際対策については、海と疫病の視点から疫病罹患の漂着者の埋葬法や痘瘡患者の無人島隔離についての知見を紹介、考察した。「第42回山桃忌シンポジウム「柳田國男と「海上の道」」でパネリスト報告をおこない、海上の道とシイラ利用をめぐる世界各地の文化との関わりを論じた。

(3)今後の課題 期間全体を通じて実施した研究は、当初の歴史地理学的な漁場図研究から歴史民俗学的な海と人との関わりの文化史研究へと展開した。国内での調査研究は、漁場の古習俗（漁場での魚盗みのカンダラ、ドーシンボウ、定置網漁場とエビスかつぎ）、回遊魚利用（シイラ、カツオ、マンボウ、サメ）の歴史を進め研究成果を出すことができたが、さらに研究を進める必要がある。海外におけるマレーシア（コタキナバル）、フィジー、南インドの漁業関係の地誌書と漁場図についての調査は予察的な内容にとどまったが、海洋比較文化史的な視点からも今後も研究を進める必要がある。コロナウィルスの影響に伴い調査研究は困難になったため、本研究は2022年度まで延長して実施した。その間に、研究は、近世期の沿岸部の疫病対応と無人島利用、柳田國男『海上の道』の回遊魚利用の視点からの再考、東北で獲れたシイラやサメの他地域への流通、シイラの地方名を事例に渋沢敬三『日本魚名集覧』が典拠とした文献を点検する魚名研究（江戸時代から現代にいたるまでの魚名地域分布表作成）、近世漁場利用関係史料翻刻紹介など、新たな展開があった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 橋村修	4. 巻 35
2. 論文標題 三陸と日本各地をつなぐ魚の利用 - シイラを中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 バイオストーリー	6. 最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋村修	4. 巻 507
2. 論文標題 江戸時代の漂流者対応と無人島利用にみる疫病の水際対策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ocean Newsletter	6. 最初と最後の頁 6 - 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 橋村修 野池優太	4. 巻 73
2. 論文標題 薩摩藩領大隅・高山郷の近世末期漁業関係史料	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 人文社会科学系	6. 最初と最後の頁 170-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 橋村修	4. 巻 1
2. 論文標題 江戸時代の沿岸域・離島における疫病の水際対策 - 異国漂流者対応、無人島隔離 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021年日韓共同学会議 自然・災害・感染症と民俗予稿集	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 橋村修	4. 巻 72
2. 論文標題 江戸時代の日記・随筆にみる各地の魚利用	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 人文社会科学系	6. 最初と最後の頁 73-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋村 修	4. 巻 300
2. 論文標題 多様に展開する「生業」研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 3 - 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村 修	4. 巻 294
2. 論文標題 書評 田和正孝『石干見の文化誌』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史地理学	6. 最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村 修	4. 巻 1
2. 論文標題 魚と海の民俗にみられる性別に関する文化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較民俗学会韓日共同学会議予稿集	6. 最初と最後の頁 168-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村修	4. 巻 70
2. 論文標題 近世末期における薩摩藩の御手網と内之浦の定置網	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要・人文社会科学系	6. 最初と最後の頁 131-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋村修	4. 巻 291
2. 論文標題 近世末期の海辺の利用 名所図会から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史地理学	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村修	4. 巻 33
2. 論文標題 近世末期「旧薩藩沿海漁場図」の構図と記載事項	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史と民俗	6. 最初と最後の頁 75 - 103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村修	4. 巻 26
2. 論文標題 近世の漂流記に見る魚と漂流者	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ビオストーリー	6. 最初と最後の頁 70 -71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村修	4. 巻 735
2. 論文標題 シイラと人との関わり方にみる地域性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 14 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 江戸時代の沿岸部の疫病の水際対策
3. 学会等名 第180回海洋フォーラム「疫病と海～コロナ禍での海とヒトの関係を考える～」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 江戸時代の沿岸域・離島における疫病の水際対策 異国漂流者対応、無人島隔離
3. 学会等名 2021年 日韓共同学会議 自然・災害・感染症と民俗(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 魚利用をめぐる文化と『海上の道』
3. 学会等名 第42回山桃忌 シンポジウム「柳田國男と『海上の道』」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 「食と環境 魚食文化による里海の保全と実践活動」コメント
3. 学会等名 日本民俗学会 第72回年会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 魚と海の民俗にみられる性別に関する文化
3. 学会等名 比較民俗学会韓日共同学会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 日本列島の視点から
3. 学会等名 生き物文化誌学会気仙沼例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 干満差に関わる神話・昔話
3. 学会等名 神話・儀礼・教育 2018年 日韓共同学会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 近世以降の海辺の多様な利用 「遊漁」「海の名所」をめぐる歴史展開
3. 学会等名 第61回歴史地理学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 魚と人との関係の歴史民俗
3. 学会等名 韓日民俗学国際シンポジウム 人間と動物の民俗世界（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 五島の定置網の歴史
3. 学会等名 シンポジウム 定置網の歴史と文化（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 「害魚」も元は「食用魚」 国境をこえる魚の移植、人に翻弄された魚 -
3. 学会等名 日韓における多文化共生社会とマイノリティ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋村修
2. 発表標題 景観写真で読み解くアジアの海辺・水辺
3. 学会等名 日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 秋道智彌・角南篤編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 西日本出版社	5. 総ページ数 240
3. 書名 シリーズ海とヒトの関係学 疫病と海	

1. 著者名 荒木一視・林 紀代美編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 264
3. 書名 『食と農のフィールドワーク入門』	

1. 著者名 李修京編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 350
3. 書名 『多文化共生社会に生きる』	

1. 著者名 石井正己編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京学芸大学	5. 総ページ数 164
3. 書名 『北海道・東北および沖縄・九州を視野に入れた歴史認識の構築と教材開発に関する戦略的研究』	

1. 著者名 藤井弘章、橋村修、堀越昌子、中園成生、日比野光敏、野中健一、東四柳祥子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 233
3. 書名 日本の食文化2 魚と肉	

1. 著者名 石井正己、菊池勇夫、松山修、印南敏秀、川島秀一、天野荘平、橋村修	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 253
3. 書名 菅江真澄が見た日本	

1. 著者名 荒木一視、林紀代美、吉田国光、野中健一、橋村修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 264
3. 書名 食と農のフィールドワーク入門	

1. 著者名 加賀美雅弘・荒井正剛・橋村修・椿真智子・青木久・牛垣雄矢・澤田康徳・中村康子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 105
3. 書名 景観写真で読み解く地理	

1. 著者名 小野林太郎・長津一史・印東道子・橋村修・秋道智彌・飯田卓・田中和彦・深山絵実梨・鈴木佑記・山極海嗣・島袋綾野・玉城毅・深田淳太郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 400
3. 書名 海民の移動誌	

1. 著者名 中園成生・小境卓治・橋村修・井之本泰・川島秀一・舛田大作	4. 発行年 2018年
2. 出版社 平戸市生月町博物館・島の館	5. 総ページ数 53
3. 書名 定置網の歴史と文化を探る	

1. 著者名 石井正己・橋村修・岩崎京子・常光徹・崔仁鶴・小泉凡・香川雅信・小川知男・足立泰紀・角南聡一郎・金容儀・伊藤龍平・齋藤君子・渡邊浩司・渡辺洋子・楊静芳・宋英淑・剣持弘子・齊藤純・飯倉義之・青木俊明・剣持弘子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 214
3. 書名 現代に生きる妖怪たち	

1. 著者名 崔仁鶴・石井正己（編）、橋村修・李相日・洪潤植・野村敬子・馬場英子・金容儀・姜在哲・金廣植・眞鍋昌弘・荻原眞子（著）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 三弥井書店（東京）	5. 総ページ数 222
3. 書名 国境を越える民俗学 日韓の対話によるアカデミズムの再構築	

1. 著者名 石井正己（編）・橋村修・金廣植・劉佳・范文・水野雄太・安松拓真	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京学芸大学石井研究室	5. 総ページ数 96
3. 書名 国際化時代を視野に入れた歴史・文化・教育に関する戦略的研究（平成28年度広域科学教科教育学研究経費報告書）	

1. 著者名 橋村修（編）・出口雅敏・水津嘉克・吉野晃・小西公大・菅（七戸）美弥	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京学芸大学地域研究分野	5. 総ページ数 62
3. 書名 多文化共生教育に関わる教科書研究	

1. 著者名 橋村修・青木久・荒井正剛・牛垣雄矢・加賀美雅弘・澤田康徳・椿眞智子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京学芸大学地理学分野	5. 総ページ数 91
3. 書名 景観写真を用いた中学校 / 高校地理教材の開発	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京学芸大学人文社会科学系 人文科学講座 地域研究分野 教授 ハシムラ オサム 橋村 修
<https://kenkyu-web.u-gakugei.ac.jp/Profiles/3/0000243/profile.html?msclkid=863c1cf2d16a11ecb7f0be12afaea880>
 東京学芸大学人文社会科学系 人文科学講座 地域研究分野 橋村修
<https://kenkyu-web.u-gakugei.ac.jp/Profiles/3/0000243/profile.html>
 東京学芸大学人文社会科学系教員紹介橋村修
<http://univinfo.u-gakugei.ac.jp/u-gakugei/hp/hasimura1.html>
 東京学芸大学教員紹介 橋村修
<http://univinfo.u-gakugei.ac.jp/u-gakugei/hp/hasimura1.html#top>
 東京学芸大学人文社会科学系 教員紹介 橋村修
<http://univinfo.u-gakugei.ac.jp/u-gakugei/hp/hasimura1.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日韓共同学会議 民俗学の歴史・方法・課題	開催年 2016年～2016年
--------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------